循環型林業の町で 地域材による家づくり

ＦＳＣ認証材による家づくり

02　下川町の循環型林業と産業クラスター
04　地域のリーダー　下川町森林組合
05　地元のＦＳＣ認証材による家づくり
06　関連事業者レポート

下川町ふるさと開発振興公社
クラスター推進部

01

町産材活用住宅による 地域経済活性化施策

町産材活用住宅助成制度

09　美幌町の概要と森林認証
10　町産材活用住宅助成制度
11　森林認証材住宅の現状と課題
12　多岐に渡る低炭素な町づくりの取り組み

北海道美幌町

02

「つくばスタイル」で 県内の山と町をつなぐ

住宅振興地「つくば」の地元工務店

13　住宅振興地「つくば」と地域材
14　「つくばスタイル」木の家クラブ
15　木の家クラブの活動と今後の課題
16　関連事業者レポート

「つくばスタイル」木の家クラブ

03

暮らしの中から 森と都市をつなぐ

水源の森と暮らしをつなぐ活動

22　女性設計者が集まった森想人
23　様々なイベント参加を通じた活動の展開
24　水源の森の木で住まいを創る
25　関連事業者レポート

森想人

05

東京/森の木の家 プロジェクト

長期優良住宅先導的モデル

18　東京家づくり工務店の会
19　東京/森の木の家プロジェクト
20　取組の実践　効果と課題
21　関連事業者レポート

東京家づくり工務店の会

04

暮らしの中から森と都市をつなぐ

女性設計者が集まった森想人

森想人 05

陶芸作家とメンバー設計者との共同アトリエ

料理教室（つぶつぶキッチン）

女性設計者が集まった森想人

森想人（もりおもいびと）は、住宅やインテリアを手掛ける女性設計者による活動グループです。メンバーの 4 人（鈴木直子氏／住工房なお（株）、小口もとこ氏／（株）ここち 住まいのあとりえ、櫻井理恵子氏／あとりえｈａｎａ、鈴木智香子氏／一級建築士事務所）は、各々自然素材、健康素材や無垢の木にこだわりを持ち、以前からシックハウスのセミナー等で顔を合わせる機会が多く、「環境」、「こども達」、「水源の森の木」、「素性の分かる木」などの様々なテーマや課題に対して、1 人では出来ないことでも何人かでやれば出来ることがあるのでは、という思いからお互いに呼びかけ合い、2007 年 3 月に森想人を立ち上げました。

『建築のプロであると同時に、女性であり母でもあるという意識や感覚を大切にすることこそ、損得や利益に縛られず、非営利的な活動を行う原動力になるのではと考えています（鈴木直子氏）。』

森想人は「森～川～海の生態系はひとつながり・子どもたちに伝えたい森からの恵み」を活動のテーマとして、特に子供たちへ伝えることを重視しています。木は伐ってはいけないもの、という子供たちの誤解を解くところから始め、そこから保護者（大人）も巻き込み、さらに暮らしや住まいの中で木を使ってもらうことで森林の保全に繋げることが目的です。また、森想人のメンバーの活動拠点は鎌倉ですが、神奈川県には水源環境のための個人県民税超過課税（水源税）があり、これらの素地を活かしつつ、あくまでも都市部の活動として、思いや声を山側に届けることができるように、「流域の木」や「近くの山の木」ではなく「水源の森の木」をスローガンとして活動しています。

身近な暮らしの中から伝える

森想人立上げ以前から、住工房なお（株）では、体に良い食材、健康な料理等をテーマに料理教室を開催していました。森想人を立ち上げてからも料理教室の活動が継続しています。当初は神奈川県の公民館等で開催していましたが、現在は家を建てた住まい手さんのお宅で開催しています。個人でやっていた頃は、料理と同時に木の家の話もしていましたが、中々伝わり難かったそうです。今は鈴木さんが料理を担当し、小口さんが家の話を担当する、という役割分担を行うことで、話も伝わりやすくなったそうです。また、ストレートに話を伝えるため、５～６人の少人数で開催しています。

『女性ならではの料理教室は参加者にとても好評で、マクロビオティックなど食の安全・体の健康というところから始めて、生活する場所も健康にと、シックハウスや無垢の木に囲まれた暮らしなどへ話を展開することで、料理だけではなく木や家の話も頭の片隅に残してもらうことができます。開催後には、住まいの相談などもあります（鈴木直子氏）。』

料理教室だけではなく、様々なイベント開催時に木育として木を使ったワークショップなども積極的に開催しています。

（木を使ったワークショップ）

暮らしの中から森と都市をつなぐ

様々なイベント参加を通じた活動の展開

森想人　05

川崎ネイチャーフェスティバル

間伐材による「kumi+ko」収納棚

様々なイベントへの参加が活動の原動力に

立上げからすぐに参加したのが「住宅リフォームフェア（東京ビッグサイト）」です。自然素材の建材を集め出展しましたが、規模はさほど大きくなく、また参加者のほとんどがプロであり「色々ありますね、少々変わっていますね」という程度の反響に過ぎず、このような展示で本当に消費者に伝わるのだろうかという疑問が残ったそうです。

その後間もなく参加したのが「川崎ネイチャーフェスティバル」です。森想人のメンバー個々人では以前から参加していましたが、森想人として初めて参加しました。ＪＲ貨物（株）やＮＰＯ法人幸まちづくり研究会、ＮＰＯ法人緑のダム北相模などが中心となり、神奈川県、山梨県、川崎市など行政の協力も得て、ＪＲ貨物（株）の新鶴見操車場跡地で毎年１回開催されるフェスティバルです。参加者は7,000 人を越える大規模なもので、2009 年で第６回目となります。象徴的な操車場跡地でのイベントを通して、都市の歴史と資源を考え、都市と水源の森をつなぎ、水源の森や都市の緑の再生を図ることが主な目的です。水源の森林整備や流域の木材で家を作る活動、都市の歴史の検証と緑の再生など、各々多岐に渡る活動実績を持つ多くの団体が参加するこのフェスティバルでは関係者同志の出会いも多く、森想人もＮＰＯ法人幸まちづくり研究会や桂川・相模川流域の木で家を作る会など、様々な活動に関わるきっかけとなりました。

ＮＰＯ法人幸まちづくり研究会が中心となって開催している活動の一つに「どんぐり育て隊」があります。都市の小学生が山から拾ってきたどんぐりを鉢で育て、３年後に山に植林するという活動で、現在は森想人も積極的に参加しています。

ＦＳＣの森の音楽祭＆上映会

2009 年 10 月に山梨県の「清里の森」で開催されたＦＳＣの森の音楽祭＆上映会は、間伐材を活用できる棚を開発しようという活動から始まったものです。開発を呼びかけると、企業等も含め様々な参加者が集まりました。山側の人たち、山梨県やＦＳＣ関係者も加わった実行委員会の段階でかなりの広がりが出来つつあり、さらにたくさんの人たちをつなげる場をつくるために、イベントの開催が企画されました。第１弾となった 2009 年は、音楽や映像でイベントを手掛ける能力を持ったメンバーが居たことから、音楽祭＆上映会という形になりました。

彼らは「環境問題」にも高い意識を持っていて、森林や木材は建築だけの問題ではないことを学ぶことが出来たと共に、彼らにとっても林業や建築のことを学ぶことができ、普段交流の無い人達が集まったことがとても良い成果を生みました。この手のイベントは赤字になることも多いそうですが、今回は赤字になることも無く、また若い参加者も多く、一般の人たちにもっと広げることを目標に、来年もイベントを開催することが決まっています。

平行して行われてきた間伐材による棚の開発も、日本の伝統技術「組子」を用いた「kumi+ko」収納棚として、音楽祭＆上映会イベントでの試作品制作開始以来、いくつもの実験・試作・展示を経て、2010 年４月からの販売が予定されています。

『４人で森想人を立ち上げた時と同じ思いですが、森想人の会員を増やすというよりも、様々な活動に参加することを通じて、色々な人達と思いや情報を共有し、イベントも仕事も一緒に手をつないでやっていく人達を増やしていくことが、何よりも活動の裾野を広げると思っています（鈴木直子氏）。』

暮らしの中から森と都市をつなぐ

水源の森の木で住まいを創る

森想人　05

水源の森の木で建てた住宅

水源の森の木でリフォームしたマンション

水源の森の木で家を建てる

神奈川県の水源にあたる山梨県の木を使って家を建てることは、森想人発足以前からメンバーの鈴木さん（住工房なお）が取組続けていることです。神奈川県が取組んでいる水源税という背景から産学官による流域の協議会が発足し、当初は「水」が主要なテーマでしたが、その中から森づくりに関する委員会が発足しました。委員会では、川上から川下への具体的な木材流通を作り出すことに力が注がれ、参加者個々人のレベルで流通を作り出す努力が行われました。その１つが鈴木さんの取組です。

鈴木さんの流域の木で家を建てる取組は、林業家の協力のもとで、立木の状態で木材を直接購入し、その後の製材やプレカットは全て鈴木さんの方で手配する、という手法で、２棟同時にこの手法で建てたそうです。

『全ての木材を手配することは出来なかったので、不足分は製材所に手配してもらいましたが、この分の木材のトレーサビリティーや価格などが不透明で、少々高くなってしまったこともあり、一番不安なところでした。しかし、設計者自らが山に入って、林業家と相談しながら立木を選ぶという経験は、とても勉強になりました。住まい手の方は元々自然素材や国産材にこだわりがあり、山にも一緒に入り、建物の上棟の際には住まい手のお子様も山の話をしてくれて、とても感動してもらいました（鈴木直子氏）。』

マンションリフォームにも水源の木を

森想人による上流域の木を使った住まいづくりは、「川崎ネイチャーフェスティバル」で出会った「桂川・相模川流域の木で家を作る会」を通じて始まりました。その一つが水源の森の木を使ったマンションリフォームです。遮音の問題など、通常マンションでは避けられる無垢の木をふんだんに使って、コンクリート造のマンションを木の空間として蘇らせるこの手法は、特に戸建住宅の少ない都市部では、地域材の需要拡大において重要な取組で、今後の展開がとても期待されます。

今回リフォームされた住まい手さんは、ネイチャーフェスティバルの参加者です。桂川・相模川流域の木で家を作る会の活動の一環として、フローリングの板材は丸太を直接購入して製材･加工を手配し、キッチンやカウンター、収納等その他の造作材は、木の国サイト（山梨県木材協会）に出向いて選び購入しました。余った端材も捨てずに住まい手にプレゼントし、電話台やお子様の学習机など、ちょっとした棚作りなどに利用してもらう予定です。建具も山梨の木材を使って職人さんに作ってもらったものです。林業家と住まい手さんの交流も積極的に行いました。無垢材は高いと思われがちですが、マンションリフォームはそもそものやり方によって価格は上下するので､木材の価格自体は高く無いそうです。

『より多くの人達に地域材を使ってもらい、地域の森に利益を還元したい、という思いが活動の原動力です。現状の地域材は欲しいときにすぐ使えるという状態になっていませんが、欲しいという声をもっと大きくしていかないと解決しないことでもあるので、今後もより多くの都市の人達へ、裾野を広げながら活動していきたいです（鈴木氏、小口氏）。』

暮らしの中から森と都市をつなぐ

関連事業者レポート

森想人 05

木の国サイト情報館／木の国サイト

「木の国や」展示販売スペース／木の国サイト情報館

山梨県産材供給拠点施設「木の国サイト」

「木の国サイト」（山梨県南アルプス市）とは、山梨県産材の供給拠点として平成 13 年に竣工した施設で、山梨県木材製品流通センター(協)、山梨県集成材事業(協)、木の国サイト情報館、という３つの機能を１ヶ所に集約させた、山梨県産材供給の拠点施設です。山梨県木材製品流通センター(協)は山梨県初の製品市場として製品を販売する他、乾燥・プレカット・DIY 製品対応等も行っています（製品入荷量約 1,850m3/年。主な入荷先は県内の森林組合や製材所、主な出荷先は県内の工務店や大工、一般ユーザー等）。山梨県集成材事業(協)は、県内人工林面積の約 30%を占めるカラマツを主とした集成材加工を行い、木の国サイト情報館は、拠点の情報発信及び交流施設として、木材製品の展示販売やイベント、研修会等を開催しています。平成 21 年 10 月からは、新たに組織された一般社団法人山梨県木材協会が情報館のスペースを借りて、県産材の普及・情報発信を行う「木の国や」を発足し、県産材に関する情報発信と共に、家具や建具、玩具や雑貨等、様々な県産材製品の展示販売を行っています。

県産材フェアやモデルハウス建設、各種専門家による講習会、夏休みのイベント等、木の国サイトの催しは多岐に渡りますが、県産材の話を理解した上で木工を行う「県産材ドールハウスづくり教室」や、実際に家を建てる人が、伐採から製材加工という県産材の一連の流れを、各事業者の協力の元で実体験し、自宅の木材として使用する「自宅建築に記念の柱を収穫するツアー」はたいへん好評のようです。

『一般の人達にはほとんど知られていなかった地元の木や県産材という言葉が、今急速に認知されてきて、問合せも増えています（山梨県木材協会職員）。』

現状の成果　今後の課題

地域材利用の意識をさらに広めるため、子育て支援センターのイベント参加等、次世代の子供達へのアプローチも始まり、教育委員会にも新たな取組を打診しているそうです。県産材利用モデルハウスも県内に数棟建築され、ますます県産材の認知度が向上し需要が拡大していくことは喜ばしい反面、県産材の安定供給等に、不安や課題もあるようです。

『地域材の流通体制は、現状ではまだまだ未整備で、実際のニーズに対応できない事も多いです。木材や建築業界が低迷する中で、県内の製材工場も減少しています。今後、安定供給委員会や需要創出委員会を立上げ、具体的な解決策を模索し、様々な取組を実行していく予定です。また、山梨県は県有林でＦＳＣ認証を取得していることでも有名ですが、認証木材製品として流通させるために必要な各事業者のＣｏＣ認証の取得がまだまだ未整備であるため、ユーザーのＦＳＣ認証製品に対する声に対応出来ない現状もあります。具体的な製品開発を通じて、関係事業者の理解と流通整備にも取組んで行きたいです。

ウッドマイルズについても積極的に取組んでいます。数値化していくことで、指標を算出する側もとても勉強になると共に、木材流通における各取引先をしっかりと意識するようになります。地域材の安定供給システムや地域材情報とセットでウッドマイルズを明示し、頑張っている地域の方々が評価され、活性化する仕組みを作りたいです。

山側に積極的に足を運び、粘り強く行動している森想人の方々には脱帽させられます。川上川下は繋がることが大切です。上流域の山側として神奈川や東京にも地域材の安定供給が出来る体制を早く確立しなければと思っています（山梨県木材協会職員）。』